# 三兄弟が協力して島づくりをした伝説（来間島立ての伝承）
## ～ヤーマスブナカ（祭り）の由来について～

岡本　恵昭（宮古島市総合博物館協議委員）

**はじめに**

創世神伝説に次のような伝承がある。

川満村のムトゥヤーに、美しい娘と一人の老婆が住んでいた。この娘がある日、畑へ芋掘りに行った。途中で小用に行きたくなって草原の中に入ると、目の前に見たことのない珍しい卵*が七つ五つ置いてあった。娘はこの卵を懐に入れ、芋を掘って家へ帰った。家へ帰ってからよく見ると、卵はいつのまにか三人の小さな男の子に生まれ変わっていた。年若い娘が突然に、また一度に三人の子供を得たので、娘はどうしてよいのか解らず、毎日悩み続けた。やがて日が経ち時が経つにつれ、子供たちはすくすく伸びてたくましく強い若者に成長した。

やがて娘は、三人の男の子供たちをどこかへ追い出そうと考え、隣の大工を頼んで丸太で舟を造ってもらい、三人をその舟に乗せて遠くへ流してしまった。舟は南へ南へと流れ行き、幾日か後に緑に覆われた小さな島へ流れ着いた。三人は島に上がり、あちらこちらと歩き廻ってやっと一軒の家を探しあてた。三人が踏み込んでみると家の中には誰もおらず、ふたをした大きな鍋が一つあるだけだった。一人の若者がふたを取ってみると、鍋の中に一人の老婆がふるえて縮こまっていた。若者達はびっくりし、老婆を助け出していろいろ問いただすと、老婆はふるえ恐怖に怯えながら、次のように話してくれた。

「この島にはヤーマスという豊年の祭りがありました。毎年、9月のきのえうまの日に盛大に執り行われていた行事です。しかし最近は、島の人達が怠けて祭りをしなくなってしまいました。祭りをやめてからもう幾年かになります。そのうち金の縄（カンヌーナワ）が天空から降りて来て、島の人々を吊し上げるようにしてさらっていくようになりました」

三人の若者達は、この話を聞いて顔を見合わせると、老婆に向かって「安心して下さい。私達で、その金の縄を退治しましょう」と言い、その場を立ち去った。やがて、金の縄が降りて来て、若者の一人を吊し巻き上げようとした。しかし、その時二人の若者が出て来て力を合わせて金の縄を断ち切ると、金の縄は跡形もなく消えてしまった。それからまもなくして島に平和がもどり、三兄弟は互いに助け合ってこの村の守り神となったということである。

ヤーマスウガンは、こうして三人の兄弟達によって盛大に行われようになり、ヤーマスプナカと呼ばれる島で最も重要な祭祀行事になったと云われる。

以上がヤーマスプナカの伝説である。

＊「卵生神話」による。天からの鳥が落とす七つ五つ（数個）の卵を草むら（ジラ）に隠す。
→島の人の始まり。池間の大主御嶽の伝承でも島が十二個の卵から十二方位
（十二支「カドの日」）の広がりを持つ。

**ヤーマスプナカ祭祀の御願行事について**

ヤーマスプナカは、来間島では旧暦の8月、9月の中で「きのえうま」の月を選んで二日間

（シツの中日と終りの日）にわたって行われる行事である。ヤーマスとは家柄の子孫繁栄と豊作祈願、島立ての神々に感謝して代々までの健康祈願を行う島が最も賑わう祭りで、男性を中心にした行事である。祭りは三軒のムトゥを中心に、それぞれの子孫が一堂に集まり、「ニーリ」「アヤグ」などが謡われる。ニーリを謡いマスムイ（ダキマス）を行って家*柄の血統を認知する行事で、一歳になった赤子の親はムトゥへの報告をかねて願い事をする。若水をあび共同体の一員として祝祭が行われる。ムトゥを中心に座（ザー）という広場に集まりクイチャー踊り、棒踊りが盛大に行われ、島外からも三ムトの系統の人々が集い酒を酌み交わして躍り、子孫繁栄の祈願と楽しい豊年の喜びの集いを終日にわたって行う村祭りである。

＊①ヤーマスブナカ　②ウプヤーブナカ　③スムリャーブナカの三つの家柄がある。

来間島のヤーマスヤー・ブナカ祭祀についての御願行事の用語解説

○ 牛について

竜宮天上を住みかとする赤牛のことを指している。この島に出現する巨大な牛は「ニッジャアカウシ（赤牛）」のことである。竜宮（リュウグウ）海底の主人公が使い慣らした赤牛で、ここでは人間を喰うパーントのことである。もう一つは創世神話で、海底の牛（ニッジャから出現する鬼の如き大牛）がおり、力の強い赤牛が海底より出現して島の人を一人一人喰ってしまうと云う。

○ ブナカ（祭祀のことで氏の元家の男系が相続する方法が認知される）

来間島最大の祭りがヤーマス・ブナカで、ブナカ集団に依る祭りである。島中の氏子が、三ムトの氏子集団に別れて、そのムト（ヒキ）で行事を行う。ここでのブナカとは、ウプヤーブナカ、ヤーマスブナカ、スムリャーブナカで、男系で長男ヤーキ（家柄）、二男ヤーキ、三男ヤーキが最新の島の始まりの家元としてムトヤーになり、その中で長男であるブナカが祖霊を中心にしていることで、ウプムトとして祭祀のすべての中心になって行事を進行させる。ヤーマス・ブナカは男系血族集団の祭りで、女性には、御願所に籠もって一晩中ニーリ、神ナーギを謡う、サスが司る神女集団がある。結局、三ムトを中心とした手づくりの豊年祭である。

ブナカを構成するムトヤーの名称には、ウプヤーキナイ、ヤーマスヤーキナイ、スムリャーキナイがある。島の祭りや共同体を構成する人々で、いわゆる来間島と何らかの縁があれば良い。昔は血縁を大切にして、男系の血脈を持った人々に限定してブナカ人数とした。

○ ヤーマスウガンの神々と東（高ガン）と西（村の守護神）の移動について

東の御嶽のテダガナシを拝し、次に下にあたる西（イリ）のクムイ゜（西御嶽）を拝む。タカガンは、ティダ（太陽神）加那志で、東の方位にある来間の島立ての御願所であって世の主を支配する。西のウガンジョ（御願所）は天太神の休む所である。高神テダガナスに方位の優位がある。西はイリの方位で神々の分化がある。

○ パーント（ファーンギ）、妖怪（男性）

昔々の伝承では、恐い妖怪がオニ（パーント）として島の人々を喰ってしまい、島の人々がいなくなる。パーントとは人を喰い去る鬼人を云う。人を喰おうという方言で、神ではないが神に近い呪力があるとされている。来間島の鬼伝説は海底・地下の底辺より出現し悪鬼となる神の化身で赤牛であると云う。

○ マスムイ

祭りの初めの日、旧年の祭りの日から今年の祭り日までの間に生まれた赤子に、マスムイと言って、ムトに童名（ヤラビナー）を報告し、ムト祖先神に酒・魚など御馳走を盛って集い、供物を供え、ムト全体の氏子（男達）の手で赤子の息災と健康に育つ事を祈る。共同体の一員となり家元（ヤームト）・拝所から認証を受けると言う儀礼である。島で最大の年中行事で「ダキマス」、「マスムイ」の祭りで生涯のムトが母方か父方かのどちらかに分かれて決定されるのである。「ダキマス」と「ヤーマス」は、家元と御嶽が中心になる祈願祭である。どの村でも行われた。

○ マスムイの意味するもの

ダキマス、マストリャー（個人的なもの）である。宮古島では、ダキマスもマスムイも酒と供物を持参し、ムトの神（イビ）にヤラビナーを報告する。その後ムトのウヤ（親）は赤子を男達に抱かせ「カリー」をつけさせてもらう。「マスヌウヤ」と「赤子」の関係は仮の親として父と子として生涯にわたって交流する。すべてにわたって島の人々が芸能を通して豊年の余祝と子孫繁盛を願う祈願祭であると考えてよい。

○ 三兄弟の和合伝説

ウプヤー、ヤーマスヤー、スムリヤーの三兄弟は心を一つにして赤牛を生け捕りにして、島人を救い豊年を約束した。赤牛はデイゴの大木に縛りつけた。

三家が各々造ったミャーカは、石灰岩やサンゴ岩で組合せられた巨石墓（ミャーカ）であると言われている。今日でも島には文化財的なミャーカ（巨石墓）として残されている。ウプヤーミャーカ、スムリャーミャーカ、ヤーマスヤーミャーカである。平民は洞窟や掘り穴墓地に埋葬された。

**来間島の島立て神話**ー流れ島によるもの・ここでは兄妹による子孫の発生

来間島の創世、起源は定まった日本の島立て神話に依るものが多い。多神教的な順次は、村立てた後に出来る高神（タカガン）など世の神と共に多神のイビが東に向かって置かれている。龍の屋（リュウのヤーガマ）の伝説に依ると島の離れの陥没があって島が出来る（島は保良岬が沈没）。来間島は岩礁がティダによって島流しになって造られたものである。寄木の主は炭焼き太郎の物語に関係があるようで興味深い（世の神、炭焼き太郎の伝説と関係する）。

**鬼牛の出現と赤牛（パーント）について**ー島立てというより人間の広がりについて

赤牛（パーント）は、決して方言で言われるような人間に悪意を持つ妖怪でなく、祝福をもたらす来訪神なのである。パーントは他界からの来訪神であり、他界と人間の世界に対する世

界観から生まれたものである。赤牛の変身行為やパフォーマンスは、村の民俗社会のコスモロジーを表象していると考えられる。

このように、赤牛が海底に住む竜宮主であるという伝承は、来間島のスマダテ（ヤーマスウガン）神話の一つであると考えられる。

## 結びとして

小松和彦によると「他界と異界は同義的に使用される例もあるが、異界は生活世界の向こう側にある世界を一括して指すのに対して、他界は死後の世界であり、異界の中に含まれるものである」とする（「妖怪と異人ー新しい妖怪論のために」『異人論ー民俗社会の心性ー』青土社 1985年）。

妖怪の基本的な理解は、かって神であったものが祀り捨てられ妖怪化する場合であるが、小松和彦は、４つのカテゴリーを持って赤牛の神格をニライから来訪した性格づけている。

①祭祀されない超自然的な存在（神としての赤牛→祭りをつづけさせる）

②異類異形、つまり他者的な存在（海底よりの出現でニッジャ赤牛）

③外のカテゴリーに属しているために恐怖を引き起こすようなもの

④人間に対して、恨み、嫉みと言うようなものを持っていて、それが原因でさまざまな災厄を人間にもたらす

という四点である（「他界、異界、異郷」、「七神と霊魂の民俗」『講座　日本民俗学』1997年雄山閣）。

柳田は「祖霊」を祭祀する社会集団の原型を、親族集団に求めており、共同体を構成する複数の親族集団に、それぞれ異なる「祖霊」が祀られていたと考えているとする。

また、折口は、マレビトは異郷の神と捉えた共同体の中あると考えた。マレピト（異人）→来訪神→マレピト（人）、プレ（原）、マレ（奇人）人＝ウヤガン（翁）→祖先・先祖と霊的関係の神のプラス志向とのかかわりのある、人と悪霊の対立（赤牛は人を食べる）である。つまり異界の神である。

二人の神観念を結合させると、来訪神とはマレピトであり「祖霊」である。これは日本民俗学研究においては一致する見解である。

筆者も、牛は海底では竜宮の主であり、牛をマレビトの幻想を考えている。

すなわち、祖霊神→霊魂→再生→気→鎮魂儀礼という展開でヤーマスウガンとヤーマスブナカが進行していく。ウヤガンは、特に共同体一致の祭祀の中にあり、人格的なものである。ヤーマスプナカの神話とウヤガン祭祀は同質のものであろう。

以上

参考文献

『カラー沖縄のまつり』「来間島のヤーマスプナカ」月刊沖縄社　1974年

『異人論ー民俗社会の心性ー』　小松和彦　青土社　1985年

『講座　日本民俗学』　雄山閣　1997年